

第 22 回
専門日本語教育学会
研究討論会誌



2020 年 3 月 6 日 (金)

於：金沢大学

専門日本語教育学会

THE SOCIETY FOR TECHNICAL JAPANESE EDUCATION

第22回 専門日本語教育学会研究討論会誌

目次

●ポスター発表

- A. 外国人介護人材の介護用語の理解を助ける視覚情報に関する調査
中川 健司 (横浜国立大学)・角南 北斗 (フリーランス)・齊藤 真美 (国際交流基金
シドニー文化センター)・布尾 勝一郎 (佐賀大学)・橋本 洋輔 (国際教養大学) 4
- B. 複数のコーパス分析に基づく接続詞使用と作文トピックの関係性
伊集院 郁子 (東京外国語大学大学院)・李 在鎬 (早稲田大学大学院)・
青木 優子 (東京福祉大学)・長谷部 陽一郎 (同志社大学)・村田 裕美子 (ミュンヘン大学) 6
- C. 保育園連絡ノートにおける保育者による日本語記述文
渡辺 史央 (京都産業大学) 8
- D. 外国人医師が現場で遭遇する言語的・文化的困難点について
稲田 朋晃 (国際医療福祉大学)・品川 なぎさ (同) 10
- E. 留学生によるプレゼンテーションをいかに評価するか
ー日本語教員と他分野教員に対するインタビュー調査の事例分析からー
福良 直子 (大阪大学) 12
- F. 日本語教育学専攻の大学院生の論文要旨作成における意識と課題
三谷 彩華 (早稲田大学) 14
- G. 日本語による法学ライティングの協働授業を振り返る教師の語り
ーSCATによる分析から見えてくることー
宮島 良子 (名古屋経済大学)・金村 マミ (名古屋大学) 16
- H. 介護施設における日本人のコミュニケーション講座の試み
星 摩美 (福井ランゲージアカデミー鯖江) 18

●口頭発表

1. マンガ学部専門授業の語彙・表現調査報告
宿利 由希子 (京都精華大学)・住田 哲郎 (同)・小柴 裕子 (同) 22
2. 医療現場における業界用語の使用状況 ー外国人看護師の学習支援に向けてー
ポポヴァ エカテリーナ (大阪大学大学院博士後期課程) 24
3. 学術共通語彙に関する音声知識と文字知識の違い
ー中国語および韓国語を第一言語とする日本語学習者に焦点を当ててー
佐藤 尚子 (千葉大学)・松下 達彦 (東京大学大学院)・笹尾 洋介 (京都大学)・
田島 ますみ (中央学院大学)・橋本 美香 (川崎医科大学) 26
4. 介護分野の中国人技能実習生受入れ現場における問題意識 ー継続的なインタビュー調査からー
高野 駿 (首都大学東京大学院博士前期課程) 28

●シンポジウム

外国人就労と専門日本語教育の役割 プログラム	31
主旨説明 「特定技能」が創設された今、外国人就労に必要な専門日本語教育が何かを問う 深澤 のぞみ（専門日本語教育学会会長）	32
発表要旨	
1. 外国人就労の場で必要とされている日本語 田中 尚人（協同組合アドビジネスセンター理事長）	32
2. 現場の専門家と日本語教師の連携をどのように行うか 加藤 敬子（金沢大学大学院博士後期課程修了）	33
3. 留学生から働く人へ そのプロセスに必要なことは何か 高沼 理恵（金沢大学特任助教）	33
4. 外国人が現場で働くときに必要な日本語とビジネス日本語 王 凱（中国南開大学副教授）	33

ポスター発表

外国人介護人材の介護用語の理解を助ける 視覚情報に関する調査

A Survey on Visual Information to Help Foreign Care Workers Understand
Technical Terms in Caregiving Field

○中川 健司^{※1} 角南 北斗^{※2} 齊藤 真美^{※3} 布尾 勝一郎^{※4} 橋本 洋輔^{※5}
NAKAGAWA, Kenji SUNAMI, Hokuto SAITO, Mami NUNOO, Katsuichiro HASHIMOTO, Yosuke

キーワード：外国人介護人材、介護用語、視覚情報

Keywords: foreign care workers, technical terms in caregiving field, visual information

1. はじめに

EPA（経済連携協定）介護福祉士候補者や介護職種の技能実習生の受け入れ、在留資格「介護」「特定技能」の創設により、日本で就労する外国人介護人材は増加の一途である。介護用語は、介護の専門内容理解の基礎をなすが、福祉や医学、生活文化など内容が多岐に渡り、その習得は容易ではない。

2. 介護用語の理解を助ける情報

中川他(2019)では、介護用語はその性質により、(ア) 疾病名（「誤嚥性肺炎」）や器官名（「冠状動脈」）のように母語にもその概念があり、訳語があれば理解できるもの、(イ) 「ユニット型特別養護老人ホーム」のような制度上の用語のように日本独自の事物や制度で翻訳しても理解できず説明が必要なもの、(ウ) 言葉による説明では理解が難しく、視覚情報、音声情報の助けが必要なものに大別できるとしている。介護においては利用者の日常生活の理解が重要な要素となるが、中には日本文化を共有していなければ理解が難しいものも少なくない。第 30 回介護福祉士国家試験では、「畳の目に沿って拭く」「茶殻をまいて掃く」といった表現が用いられたが、これが (ウ) に該当する。中川他(2019)では、現時点では (ウ) のような視覚情報を系統立てて扱った教材は存在しないことも指摘している。

3. 研究目的・方法

発表者らは、1. および 2. で述べた現状を鑑み、介護用語の理解に適した視覚／音声情報等の素材を作成し、検索・表示が可能な形に整備した「介護の日本語の理解のための視聴覚素材ライブラリ」の開発を準備中である。そこで、本研究では、外国人介護人材の理解を助けるためには、どのような介護用語にどのような視覚情報を付すべきかを検証することを目的として以下の調査を行った。介護専門語彙学習支援サイト『かいごのご！』収録の見出し語 2,545 語を調査対象とし、次の①②の段階を踏んだ。①野村他（2017）で、上記 2,545 語の見出し語にその意味特性に基づき、一つまたは複数のラベルを付したが、うち「食事（94：当該ラベルを付した語数、以下同様）」「生活（3）」「家事（25）」「器具・機械・道具（121）」のラベルを付した 236 語について、発表者らのうち 4 名（中川・齊藤・布尾・橋本）が「a. 視覚教材化すると有効な語彙」「b. 視覚教材化しなくても意味が明確な語彙」「c. 視覚教材化が難しいもの（概念、法律など）」のいずれであるかを選択した。その結果 a.以外の答えが 2 つ以上ある見出し語 153 語を除外し、81 語を残した。②この 81 語について、介護の日本語学習支援の経験のある日本語教師 5 名に、外国人介護人材が、この介護用語を理解する上で 1.動画、2.写真、3.イラスト、4.音声情報のどの情報があると助けになるかについて尋ねた。介護の日本語学習支援経験者を対象としたのは、外国人介護人材が介護用語を理解する上でどのような

※1 横浜国立大学教授 ※2 フリーランス

※3 国際交流基金シドニー文化センター

※4 佐賀大学准教授 ※5 国際教養大学助教

表1 介護用語の理解を助ける視覚情報

1.動画	2.写真	3.イラスト	語数	介護用語例
○	○	○	3	経管栄養法、ギャッチベッド
○	○		21	全粥、トロミ食、歩行補助具
	○	○	16	消化器ストーマ、特殊尿器
○			2	しみ抜き、背部叩打法
	○		31	歩行補助杖、リーチャー
		○	6	尿路ストーマ、差し込み便器

情報が必要か判断するためには、ア．介護用語の知識、イ．学習支援の経験から得られた外国人介護人材の学習上の困難点に関する知見、の両方が必要だと考えたためである。

4. 結果および考察

4-1 結果

結果は、前述の介護用語 81 語のうち、動画があると理解の助けとなるとされたのが 26 語、以下写真が 71 語、イラストが 25 語あったが、音声情報が理解を助けるとされた語はなかった。動画、写真、イラストの全てに関して理解の助けになるとされた語が 3 語、動画、写真の両方が助けになるとされた語が 21 語、写真、イラストの両方が理解の助けになるとされた語が 16 語あった（表 1）。

4-2 複数の視覚情報が必要とされた語

上述のように、複数の視覚情報が必要とされた語が 40 語と全体の約半数を占めた。②の調査で回答者に個々の介護用語の視覚情報についてコメントをつけてもらったが、動画、写真、イラストの全てに関して理解の助けになるとされた「経管栄養法」については、「体内でどのようにチューブがつながっているかわかるようにする。」「実際の手順を動画で」というコメントがあった。このように、同一の語であっても、その構造や使い方、手順、類義語のどの側面に焦点を当てるかによって、異なる種類の視覚情報が必要だという判断がなされたと考えられる。

4-3 介護用語による視覚情報の傾向の違い

「三分粥／五分粥／全粥」のようにその違いが動き（この場合は食品の粘り方）により表せるもの、「段差解消機」「移動用リフト」のように使用時の

動作がわかるものは動画が適切という意見が多く、「尿路ストーマ」「差し込み便器」のように排泄に関連した語はイラストが適切という意見が多かった。

5. おわりに

外国人介護人材の増加、多様化により、介護の日本語の学習支援の経験がない者が支援を担当する状況となっている。そのような支援者にとって、どのような介護用語が理解が難しいか、また、その理解を促すためにどのような情報が必要かを把握するのは容易ではない。本研究の調査結果は、介護用語を教える際の一つの指針となりうる。今後は本調査の結果を踏まえて、教材化に向けて視覚情報の作成に入る予定である。（nakagawa-kenji@ynu.ac.jp）

付記：本発表は、科学研究費補助金研究課題「介護の日本語の理解のための視聴覚素材ライブラリの開発（代表者：中川健司 19H01268）」の研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 中川健司・角南北斗・布尾勝一郎・野村愛・中村英三・宮本秀樹「外国人介護人材の介護用語の理解を助ける情報の分類」第 27 回日本介護福祉学会発表要旨集 p.118 (2019)
- 2) 介護専門語彙学習支援サイト『かいごのご！』(<https://kaigonogo.com/>)
- 3) 中川健司・角南北斗・齊藤真美・布尾勝一郎・橋本洋輔「専門用語の属性に着目した介護分野の語彙に関する分析－学習支援サイト『かいごのご！(仮称)』の開発に向けた調査－」第 19 回専門日本語教育学会研究討論会誌、pp.28-29 (2017)

複数のコーパス分析に基づく接続詞使用と 作文トピックの関係性

A study of correspondence between types of topics and use of conjunctions in learner corpora

○伊集院 郁子^{※1} 李 在鎬^{※2} 青木 優子^{※3} 長谷部 陽一郎^{※4} 村田 裕美子^{※5}
IJUIN, Ikuko LEE, Jaeho AOKI, Yuko HASEBE, Yoichiro MURATA, Yumiko

キーワード：接続詞、コーパス、コレスポネンス分析、作文支援システム

Keywords: Conjunctions, Corpus, Correspondence Analysis, Composition Support System

1. はじめに

自身の考えを論理的に述べることは、高等教育機関における修学活動を遂行する上では、不可欠な能力と言えるが、この能力を個々の教員がクラス活動の中で育てるのは容易ではない。この課題をうけ、本研究グループでは、科研費（19H01273）の補助を得て、論理的文章作成の執筆を支援する自立学習型のウェブシステムを作成しており、その第一ステップとして、接続詞のカテゴリー提示機能を入れる予定である。しかし、どの接続詞を入れるべきかの判断が難しいことから、コーパスデータをもとに学習者の使用状況に関する調査を行った。具体的には複数のデータベースを利用し、学習者の作文においてどのような接続詞がどれだけ使われているかを調査した。調査の結果、「理由」と「並列・列挙」はどのテキストにも普遍的に出現するのに対して、「逆接」「例示」「順接」「まとめ・換言」「譲歩」は作文のタスクによって差が見られたことを報告する。

2. データと方法

市川（1978）や石黒（2008）を参考に8カテゴリー（順接、逆接、対比、並列・列挙、理由、譲歩、例示、まとめ・言い換え）の接続詞103項目からなる基本リストを作成した。これらの項目が作文コーパスの中で

どのように使用されているかを調査した。調査に使用したコーパスは、以下の3つである。

1. 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」
(<http://lsaj.ninjal.ac.jp/>、以下 I-JAS)
作文テーマと字数：私たちの食生活：ファーストフードと家庭料理（600字程度）
2. 「日本語学習者作文コーパス」
(<http://sakubun.jpn.org/>、以下 JC 作文コーパス)
作文テーマと字数：外国語が上手になる方法について（300～800字）
3. 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」
(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/terms.html>、以下意見文 DB)
作文テーマと字数：インターネット時代における新聞や雑誌の必要性（800字程度）

これらのデータには、異なるトピックの作文が収録されており、トピックの違いによる接続詞の出現傾向にどのような違いが見られるかを調査した。

分析方法は、共起ネットワーク分析（KH Coder）とコレスポネンス分析^{注1}（IBM SPSS）である。

3. 結果と考察

調査の結果、異表記を含む96種類の接続詞を含む3601例が抽出された。3種のコーパスに共通して出現した接続詞は51種類であった。共起ネットワークに

^{※1} 東京外国語大学大学院・准教授

^{※2} 早稲田大学大学院・教授

^{※3} 東京福祉大学・講師

^{※4} 同志社大学・准教授

^{※5} ミュンヘン大学・講師

より各コーパスでどのような接続詞が使用されているか確認した上で、カテゴリー×コーパスでクロス集計した(表1)。続いて、表1に基づき、接続詞カテゴリーとコーパスの対応関係を明らかにするためにコレスポネン分析を行った(図1)。その結果、I-JASは「逆接」と「例示」、JC 作文コーパスは「順接」、意見文DBは「まとめ・換言」及び「譲歩」と対応関係が見られることがわかった。そして、「理由」及び「並列と列挙」は特徴がないことからどのテキストにも普遍的に出現するものであり、「対比」はどのテキストとも対応が明確でないことが明らかになった。

「理由」(例:なぜなら)及び「並列と列挙」(例:まず、次に、さらに)は、主張の根拠を記述する際に利用しやすい接続詞であるため、いずれのコーパスにも偏りなく出現していたと考えられる。

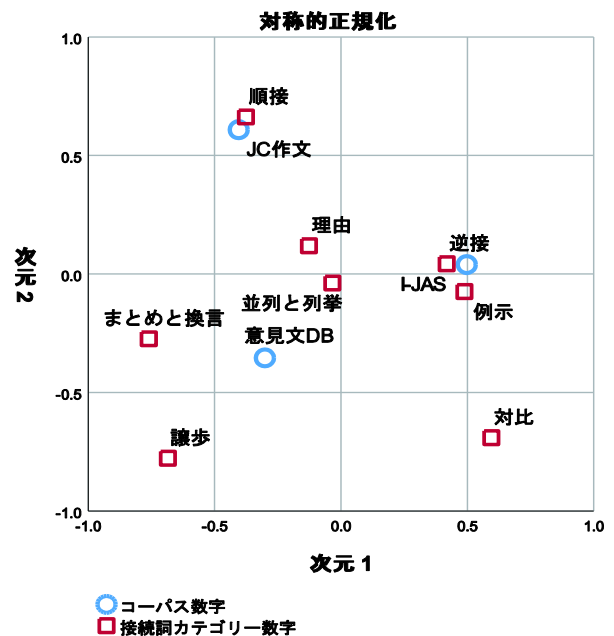
4. まとめと今後の課題

本研究の調査結果は、作文のトピックによって好まれる接続詞タイプ(例:I-JASは「しかし」や「例えば」、JC 作文コーパスは「だから」、意見文DBは「以上」や「つまり」、「確かに」)が存在する一方で、普遍的によく使用される接続詞(例:それから、また、そして)、そもそも使用されない接続詞(例:ゆえに、それでは、だとすると、ならびに、または、いわば、いずれにしろ)が存在することを示す。

この結果をうけ、コーパスで使用が確認された96種(異表記を除いた場合は75種)の接続詞をもとに自

表1 接続詞のカテゴリー*コーパスのクロス表

	I-JAS	意見文DB	JC 作文	合計
例示	114	79	35	228
理由	30	31	18	79
並列と列挙	463	472	235	1170
対比	67	55	9	131
譲歩	56	129	36	221
順接	176	180	164	520
逆接	480	333	171	984
まとめと換言	66	140	62	268
合計	1452	1419	730	3601



#次元1のイナーシャの寄与率^{注2} = .645

#次元2のイナーシャの寄与率 = .355

図1 コレスポネン分析の結果

動で接続詞を抽出し、カテゴリー別に表示する機能を科研の研究課題である作文支援システム「jWriter」(<https://jreadability.net/jwriter/>)に実装する予定である。この表示機能を使うことで、文と文の接続関係が可視化される。こうした可視化機能を評価の材料として活用することも今後、検討していきたい。

付記

本研究は、科研費(19H01273)の補助を得て行った。

注

注1 コレスポネン分析とは行と列からなるデータの特徴を図示し、項目間の関係を視覚的に把握する多変量解析の方法である。偏りの小さい項目は原点付近に、偏りの大きい項目は原点から遠くに布置される。

注2 コレスポネン分析における各次元の寄与率を0~1の連続値でもって示す定量指標。

参考文献

市川孝(1978)『国語教育のため考の文章論概説』教育出版
石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社新書

保育園連絡ノートにおける保育者による日本語記述文

—使用語彙の特徴を中心に—

An Analysis of Japanese in the Contact Notes Written by Nursery Teachers:
Focusing on the Feature of the Used Vocabularies.

渡辺 史央^{※1}
WATANABE, Shio

キーワード：保育園、連絡ノート、保育者、使用語彙

Keywords: nursery school, contact notes, nursery teachers, use of vocabularies

1. はじめに（背景および目的）

保育所保育指針^{注1}では、保護者に対する子育て支援として「子どもの日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図るように努める」ことを定めている。松村（2010）が指摘するように、保育園連絡ノートは「保護者と保育士を結ぶ役割を担うもの」であり、子どもにゆっくり関わることでできない保護者が「子どもの育ちを知り、また育児の悩みを相談できる貴重な存在」であると同時に、保護者に安堵感を与えるものでもある。近年、外国人の増加とともに保育園に通う外国にルーツをもつ子どもが増え、保護者のための連絡帳ライティング支援の先行的な取り組みもある。^{注2}しかし、保育園における保育者（以下、保育者）の連絡ノートにおける記述文に関する研究は管見の限りではない。本研究は、保護者と保育園の重要なコミュニケーションツールである連絡帳を対象に、その記述文の特徴を明らかにすべく、保育者による記述文における語彙選択の特徴を中心にみていこうとするものである。

2. 方法

分析対象としたのは、3名の園児が在園中に使用した計6冊分の連絡帳である。それぞれの園児の在園期間は、園児A（6年4ヶ月）、園児B（6年5ヶ月）、園児C（5年5ヶ月、2019年8月現在在園中）である。分析対象となった連絡帳記入者の異なり数は20名（記入者A～T）である。まず、保育者による記述部分をテキストデータ化し、表記等について一部修正した後、

KH Coder を用いて形態素解析を行い、語彙選択の特徴について分析した。

3. 結果および考察

テキストデータ化した記述文の総抽出語数は17810語（異なり語数3740語）である。うち、助詞等を省いた5800語（異なり語数2810語）を分析対象として使用した。以下、具体的なデータを示し、考察する。

(1) 擬音語・擬態語の使用

各学年（クラス）における全体の使用語数に占める擬音語・擬態語の割合を調べたのが表1である。表1より、学年（クラス）が上がるにしたがって擬音語・擬態語の出現率が低くなるのがわかる。このことより、言葉を発する年齢に達していない乳児においては、園児の発話を記述することが難しく、保育者が擬音語や擬態語によって園児の様子や行動をより具体的に表わそうとする傾向があることがうかがえる。なお、もっとも多く使用される語彙として、園児の笑顔を表す擬態語である「ニコニコ」「ニコリ」「ニコ(ッ)」

表1 擬音語・擬態語の出現率

クラス(学年)	記入者	抽出語数	異なり語数	全体の抽出語数	全体の抽出語数に占める割合(%)
0歳	A,B,G,H,N,O	28	18	960	2.9
1歳	A,C,G,I,O,P	17	11	802	2.1
2歳	C,D,J,K,N,Q	13	8	790	1.6
3歳	C,E,K,L,R,S	11	10	1078	1.0
4歳	C,D,F,L,M,T	6	5	1027	0.6
5歳	C,G,K,L	10	9	1143	0.9

※1 京都産業大学外国語学部准教授

表2 擬音語・擬態語の例

動作	スタスタ、トコトコ、ちょこまか(歩く)、ぐるぐる(走り回る、巻き付ける)、ぐるり(回る)、(水を)パシヤパシヤ(かける)、チュクチュク(スコップで砂を刺す)、パチパチ(手を鳴らす)、スッ(入れる)、ポイツ(投げる)、パクパク、モグモグ(食べる)、(カーテンを)ヒラヒラ、ピリピリ(破る)、ちょこん、ドスン(座る)、パアッ(顔を出す)、ぺったん(壁にくっつく)
表情	ニコニコ、ニッコリ、にやり、フツツ(笑う)、パア(明るくなる)、ちらっ(見る)、じーっ(見つめる)
心情	ドキドキ、ワクワク

があり、全体で23例(0歳児8例、1歳児6例、2歳児5例、3歳児3例、5歳児1例)あった。他にも、嬉しい様子を表す語である「ウキウキ」が10例(1歳児2例、2歳児2例、3歳児3例、4歳児1例、5歳児2例)あった。他にも園児の「動作」「表情」「心情」を表すものが多数みられた(表2)。

(2) 使用語彙の特徴

名詞と動詞について、使用語彙をみた。その結果、出現回数が比較的多かった語は表3のようになった(名詞類690語、動詞類347語中、上位20位)。さらに、出現回数の多かった上位100語について「リーディング チュウ太」を用いて語彙レベル判定を行った。その結果、名詞については、N5が35%、N4が12%、N2N3が28%、N1が7%、級外は28%であった。級外は、「保育園」「参観」「担任」といった保育園関係の語のほか、「砂場」「積み木」「スコップ」といった遊具や道具名が多い。また、出現回数が第2位の「園庭」は、「園」(N2N3)、「庭」(N5)であった。同様に、動詞についても上位100語について語彙レベル判定を行った結果、N5が47%と約半数を占め、続いてN4が27%、N2N3が24%、N1(「揃う」と級外(「走り回る」)はそれぞれ1語のみであった。これより、名詞については、高度な語彙や表現は出にくい一方、日常ではさほど使わない保育園特有の語や表現は出やすい傾向があること、また、動詞については、総じて高度な表現が出にくいといったことがわかる。

(3) 絵文字、記号の使用

表3 頻出語彙(名詞・動詞)

名詞	友達、園庭、一緒、遊び、プール、先生、リズム、自分、グループ、ボール、お願い、練習、ドッチボール、手、声、様子、お母さん、休み、笑顔、水、おうち、部屋、顔
動詞	する、なる、遊ぶ、見る、楽しむ、言う、行く、作る、頑張る、入る、ある、できる、食べる、思う、描く、聞く、来る、いる、教える、見せる、話す

保育者の記述に、絵文字(☺等)やマーク(♡等)を多用する傾向がみられた。松村(2010)によると、保育士が連絡帳の書き方の中で留意する点として、「親を不安にしない」「母親への心遣いをさりげなく」「笑いはなるべく伝える」という項目がある。文字表現だけでなく絵文字やマークを使用することで、保護者に安堵感や子どもの成長の喜びを伝えようとしていることがうかがえる。

(4) 構文的特徴

他にも園児の様子を記述する際、園児名による名詞止めの多用(「～だった〇〇くん」)、授受表現の多用など、特定の文型や表現が使用される傾向がみられた。

4. おわりに

今後は、他の品詞や構文的特徴についても検証し、保育園連絡ノートの持つ機能(事務連絡、遊びの様子を伝える、保護者の記述への回答、挨拶やお礼等)別に特徴をみていきたい。本研究は、保育の記録の担い手である保育者が、記述に際してどのような語彙や構文を使用する傾向があるのかを明らかにしようとするもので、将来的には外国人保護者への支援だけでなく、外国人ベビーシッターなどが日本語で保育記録をする際の日本語支援にもつながると考えている。

(shiwata@cc.kyoto-su.ac.jp)

注

注1 厚生労働省 平成29年3月31日告示

注2 参照ウェブサイト:<https://renrakucho.net/ruby/>

(最終閲覧日:2020年1月3日)

参考文献

- 1) 松本和美: 保育士を目指す学生のための連絡帳の書き方について, 鶴見大学紀要, 第47号, 第3部, pp.53-57, (2010)
- 2) 富谷玲子・内海由美子・仁科浩美: 子育て場面で外国人保護者が直面する書き言葉の課題—保育園・幼稚園児の保護者を対象とした調査から—, 神奈川大学言語研究, 第34巻, pp.53-71, (2012)

付記 本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「外国人家事支援人材に対する日本語教育・日本語学習支援プログラムの開発」(課題番号18K00699)の研究成果の一部である。

外国人医師が現場で遭遇する言語的・ 文化的困難点について

Linguistic and Cultural Difficulties the Foreign Doctors Encounter in the Clinical Setting

○稲田 朋晃^{※1} 品川 なぎさ^{※2}
INADA, Tomoaki SHINAGAWA, Nagisa

キーワード：医療コミュニケーション、医学日本語、医学教育
Keywords: Medical Communication, Medical Japanese, Medical Education

1. 背景・目的

医師を目指す外国人に対する日本語教育研究は、医師国家試験に出現する名詞語彙を分析した山元ほか（2018）、医療語彙の習得状況を検討した稲田ほか（2019）などによって進展しつつある。これらの研究は、膨大な数の医療語彙の習得や使用が非母語話者にとって非常に困難であるという想定のもとに行われている。しかし、実際の医療現場において非母語話者にとって医学日本語のどのような側面が困難であるかについては、ほとんど明らかでない。

そこで、本研究は外国で生まれ育ち日本で医師として働く人々が実際の臨床現場で患者や他の医療従事者とコミュニケーションをとる際にどのような言語的・文化的困難点に遭遇しているのかを調査した。

2. 方法

調査協力者は、表 1 に示した 4 名（A～D）である。全員、日本の医師国家試験に合格し、医師免許を取得後、日本の病院に勤務している。

4 名の調査協力者に 1 名ずつ半構造化インタビューを実施した。インタビュアーは、筆者 2 名である（Aのみ筆者のうち 1 名）。

質問は全 11 項目であるが、本研究ではそれらのうち「患者とのやり取りの中で困難を感じたことがあるか」「他の医療従事者（医者、看護師など）との

やり取りの中で困難を感じたことがあるか」の 2 項目の結果のみを取り上げる。

インタビュー時間はそれぞれ 53 分（A）、104 分（B）、58 分（C）、41 分（D）であった。録音音声文字化し、佐藤（2008）を参考にセグメント化とコーディングを行った。

3. 結果

コーディングの結果、「患者とのやり取りにおける困難点」「他の医療従事者とのやり取りにおける困難点」のコードが付されたセグメント数は、表 2 のとおりとなった。以下ではそれぞれの具体例を見る。

3.1. 患者とのやり取りにおける困難点

理解の面では、「患者が『ずきずき痛む』『ぎゅっとする痛み』などのオノマトペを使うと理解できない（A）」「方言が理解できない（A）」「高齢者は発音をはっきりせず、何を話しているか分からない（D）」などの困難点が抽出された。

発話ややり取りの面では、「救急外来の際に、検査の必要性の事前説明が不十分だったため患者が怒った（A）」「全身麻酔の説明の際に練習が不足しており患者にうまく伝わらなかった（D）」など医療行為についての説明で困難を感じた例が聞かれた。また、「患者に話すときに丁寧で簡単な表現が思いつかない（A）」「子供と話すときに、接し方が分からない（B）」という困難点も抽出された。

コミュニケーションがうまく行かない場合の患者の反応としては、患者の表情から理解していないこ

※1 国際医療福祉大学医学部講師

※2 国際医療福祉大学総合教育センター講師

表1：調査協力者一覧

記号	母語	勤務地	年齢	滞日年数	母国の医師免許
A	タイ語	近畿	20代	7年	無
B	中国語	関東	30代	9年	有
C	モンゴル語	関東	40代	13年	有
D	中国語	関東	40代	18年	有

とが分かる場合もあれば、「うまく話せず、患者から聞き返されたり、『日本語を話してよ』と言われる(A)」のように、直接聞き返しをされることもある。大きいトラブルに発展したケースでは、患者から医師の交代を要求されることもあったという。

コミュニケーションがうまく行かない場合の医師の感情・反応としては、「『日本人じゃないですよね』などと言われると、次の医療行為を行う上で不安になる(B)」などの反応が聞かれた。一方で、「自分は常に学び続けている存在であり、患者が安心して治療を受けられることがもっとも大切だという考えを持つ(B)」のように積極的に困難を乗り越えようとする姿も見られた。

患者とのコミュニケーションがうまくいかない場合の対処法としては、指導医や看護師など周囲の医療従事者に援助を求める例が多く見られた(A、B、C、D)。「通じていないと思ったら言い換えなどをする(C)」など先回りして問題を回避する方策も聞かれた。

3.2. 他の医療従事者とのやり取りにおける困難点

「初期研修のころ、『ゲフ』^{注1}など他の医療従事者が使う略語の理解が難しかった(C)」という意見があった。また、「指導医との即時的なやり取りが難しい。携帯電話でやり取りすることが難しい(B)」という声も聞かれたが、指導医の個性による部分が大きいようである。

4. 考察と今後の課題

全体的には「他の医療従事者とのやり取りにおける困難点」よりも、「患者とのやり取りにおける困

表2：分析対象となったセグメント数

	A	B	C	D
患者とのやり取りにおける困難点	17	26	3	10
他の医療従事者とのやり取りにおける困難点	7	10	1	5

難点」への言及が多かった。

患者の発話を理解する際には、オノマトペ、方言など、医学教科書では学べない語彙や表現が難しいようである。患者への発話ややり取りの面では、医療行為の説明を行うときに十分に理解されなかった例が複数抽出された。ただし、これについては研修医ゆえに説明行為自体に不慣れであったことも影響している可能性がある。

聴くことや話すことと比較して、読み書きの面での困難点については、ほとんど言及がなかった。今回の調査協力者は、全員が日本の医師国家試験に合格しているため、読み書きについては十分訓練できているものと予想される。

また、文化面での違いによる困難についても、言及は少なかった。今回の調査協力者は、日本で医学教育および研修を受けているため、日本の医療文化に慣れ親しんでいると考えられる。

今後は、周囲の医療従事者への聴き取り調査もあわせて行い、多面的に問題を検討する予定である。

(tomoaki_inada@iuhw.ac.jp)

注

注1 「ゲフ」とは、ドイツ語「ゲフリール」の略で、術中迅速病理診断のことである。

参考文献

- 1) 稲田朋晃・品川なぎさ・小林元・石川和信(2019)「医学部留学生の医学日本語語彙の学習状況」『第51回日本医学教育学会予稿集』p.177
- 2) 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』新曜社
- 3) 山元一晃・稲田朋晃・品川なぎさ(2018)「医師国家試験の名詞語彙の対数尤度比に基づく分析と教材開発の可能性」『日本語/日本語教育研究』9, pp.245-260

留学生によるプレゼンテーションをいかに評価するか

—日本語教員と他分野教員に対するインタビュー調査の事例分析から—

How International Students' Oral Presentations Should Be Evaluated:
A Case Study of Interviews to Japanese Language Teachers and Teachers in Other Fields

福良 直子^{※1}
FUKURA, Naoko

キーワード：プレゼンテーション、評価、日本語教員、他分野教員

Keywords: oral presentations, evaluation, Japanese language teachers, teachers in other fields

1. 研究の背景および目的

昨今、大学の内外においてプレゼンテーション(以下プレゼン)が果たす役割が大きいことは広く知られている。日本で就職した元留学生へのインタビュー調査を行った研究¹⁾では、各自の専門分野での論文執筆や研究発表の経験が、論理的な思考能力やプレゼン能力の獲得につながり、それらが社会での実務に活かされていることが示されている。また、大学生が獲得すべきプレゼン能力に関する書籍調査²⁾では、特に言及が多かった能力として「内容検討能力」「資料作成能力」「話し方(発話)能力」「動作・態度に関する能力」が挙げられており、多岐にわたる複合的な能力が必要であることがわかる。

このように、プレゼン能力の重要性は明らかであるものの、日本語教育学におけるプレゼンに関する研究はまだ数が少なく、特に評価に関する研究は限られている。例えば、プレゼンの評価にルーブリックを使用した実践報告³⁾では、教師間、学生と教師間および学生間の評価の差異を認識し、評価基準を共有することの意義が指摘されている。

本発表は、日本の大学に在籍する留学生へのより効果的なプレゼン教育方法の構築を目指し、プレゼンの評価がいかに行われているか、まずその実態の一端を質的に示すことを目的に、大規模実態調査の前段階となる基礎調査として、事例分析を行った。なお、アカデミックライティングの評価に関する研究⁴⁾では、パフォーマンス評価には評価者の要因の

影響が大きいとの指摘があり、これはプレゼンの評価にも該当すると言える。本発表では、評価者の専門分野の違いや各授業における学習目標の違いが評価の観点や基準にも影響すると考え、日本語教員と日本語教育学以外の他分野の教員へのインタビュー調査による事例分析を行い、プレゼンの評価に関する見解の一端を明らかにすることを試みる。

2. 方法

2019年11月～2020年1月に関西地区のある総合大学において、留学生が主な対象の授業でプレゼンを扱う教員、1)日本語教員3名、2)日本語教育学以外の他分野(工学系や教育学系)の教員3名の合計6名に対し、各約1時間の半構造化インタビューを行った。許可を得た上で録音し、文字化したものをデータとした。プレゼンの目的、概要、準備期間中の指導、指導上の課題等を尋ねた上で、評価方法と評価上の留意点について、次章に示す見解を得た。類似点および相違点として特徴的な発言を中心に抽出し、分析を行った。担当する留学生の日本語レベルは、授業により異なり初級から上級まで多岐にわたる。他分野の教員が担当する授業は、留学生も日本人学生も受講できる共修科目である。授業は主に英語で行われており、プレゼンは英語でも日本語でもどちらで実施してもよいとの指示がなされていた。

3. 結果および考察

3. 1 評価方法および評価上の留意点

^{※1} 大阪大学国際教育交流センター特任講師

日本語教員と他分野の教員に共通した評価方法として、「教員の評価」に加え、「自己評価および学生同士の相互評価」が挙げられる。他分野の授業では、日本語の授業に比べ受講者数が20名前後でクラスサイズが大きいいため、主にグループによるプレゼンが実施されており、グループに対する評価と個人に対する評価が行われていた。グループプレゼンでは、準備過程を含め、協力し合えたかどうか、重視されていた。協力者6名に共通して、評価には、内容、構成、時間や発表態度など項目ごとの5段階評価やコメントの自由記述、ルーブリックなどが使用されていた。日本語教員と他分野の教員に共通した評価上の留意点は、評価基準の明確化である。

他分野の教員の中には、評価に使用するルーブリックを学生とともに作成するという事例も見られた。プレゼンの準備段階からルーブリックを活用し「各項目がクリアされたらプレゼンの内容が良くなる」よう評価項目を作成しているとの留意点が挙げられた。プレゼンの準備段階から評価基準を明確化することにより、受講者にはプレゼンの質的向上に必要な観点への意識化が促されるものと考えられる。

3. 2 評価に関する見解

グループによるプレゼンに対して、学生同士の相互評価の点数の平均に教師のコメントを加えて評価するという教員は、「学生の評価と教員の評価は結構相対的なもの」で「そう変わらない」と述べ、学生と教員の各々による評価に大きな差異はないとの見解を示した。これは、先述の実践報告³⁾の見解とは異なるが、以下に述べるように、日本語の授業では言語面が評価に影響するのに対し、他分野では内容がより重視されるためではないかと推測される。

評価上特に重視する点として、プレゼンの「内容」と聴衆への働きかけや質疑応答などの「聴衆とのインターアクション」が協力者6名に共通していた。また、どの教員も共通して「準備の重要性」に言及していた。アンケート調査などを実施し「そこそこ時間がかかっている、準備したことがわかる」グループには、加点して評価するという事例も見られた。

しかし、日本語教員は、文法・表現の正確さや発音の明瞭さなど言語面からも評価しているのに対し、

他分野の教員は、使用言語が日本語であれ英語であれ、言語面の誤りは、聴衆の内容理解を妨げない限り、評価には影響しないとの見解を示した。具体的には、「言語能力と内容が把握できているかは別」であり、「稚拙な言い方でも根拠が示されていることが重要」であるとの見解が示された。すなわち、高度な表現が使用されていなくても、「発表者が自身の発表内容を理解し、根拠を示して説明できているかどうか」が重視されているものと言える。

4. 結論と今後の課題

以上、限られた事例ではあるが、日本語教員と他分野の教員によるプレゼンの評価は、「内容」と「聴衆とのインターアクション」が重視されていることから、「聴衆に内容をいかに伝えられたか」という点が主に評価されているものと言える。また、他分野における言語能力の高低に関わらないプレゼンの評価方法は、日本語教育におけるプレゼン教育に対して新たな視座を与え得るものであろう。今後は、さらに調査対象を広げ、評価の観点や基準の多様性をふまえた上で、分野横断的に共通して求められる評価の観点を示していきたい。

(fukura-n@ciece.osaka-u.ac.jp)

参考文献

- 1) 菅長理恵・中井陽子：理科系ベトナム人国費留学生のキャリア形成—グローバル人材に必要な資質—, 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, 第41号, pp.29-45 (2015)
- 2) 山下祐一郎・中島平：プレゼンテーション能力の評価方法確立のための書籍調査とその評価方法を用いた情報システムの開発, 教育情報研究, 東北大学大学院教育情報学研究部, 9, pp.63-70 (2010)
- 3) 長谷川由香：プレゼンテーション評価におけるルーブリックの導入報告, アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル, 11, pp.10-18 (2019)
- 4) 田中真理：パフォーマンス評価はなぜばらつくのか? —アカデミックライティング評価における評価者の型, 宇佐美洋編, 「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて, くろしお出版, pp.34-53 (2016)

日本語教育学専攻の大学院生の論文要旨作成における意識と課題

A study of the graduate students' strategies and difficulties in writing abstracts of academic papers

三谷 彩華^{※1}
MITANI, Ayaka

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ、要旨、大学院生、インタビュー調査、意識
Keywords: Academic Japanese, abstract, graduate students, interview, strategy

1. 本研究の背景と目的

研究論文や学会発表など、研究成果を発表する際には、要旨^{注1}を作成する技能が求められる。

近年、学部生や大学院生を対象としたアカデミック・ライティング教材が種々出版されているが、「研究や論文に関する知識的なものも、論文執筆を含む研究活動における手続き的なものも広く含む」(村岡 2014:95)知識の総体である「論文スキーマ」のない学生にとっては、「教材を必ずしも有効には活用できないという問題が存在」(村岡 2014:64)している。

村岡(2014)では、「テキスト分析タスク」活動における学習者による文章評価基準や作業時の発話を分析し、学習者の論文スキーマ形成過程の様相を明らかにしている。しかし、タスクには原文を要約する要旨作成の課題はない。また、論文要旨に関する先行研究には、学会誌に掲載された要旨に用いられる表現や構成要素の特徴を明らかにした李他(2011)や三谷(2017)はあるが、実際に要旨を執筆する学生の作成過程における意識や問題点は分析していない。そこで本研究では、アカデミック・ライティングの中でも要旨に着目し、大学院生の要旨作成過程における意識と課題を明らかにする。

2. 本研究の調査・分析方法

本研究の調査協力者は、大学院で日本語教育学を専攻する修士課程全 10 名(日本人学生 5 名、留学生 5 名)で、5 名は日本語での卒業論文執筆経験者である。調査協力者には、指定した研究論文を読んだ後

400 字の要旨作成を依頼し^{注2}、作成後、作成過程についての半構造化インタビューを行った。

インタビューは文字化し、「定性的コーディング」(佐藤 2008)の手法を援用したコーディング作業を行った。類似したコードはグループ化し、抽象化を経てカテゴリーに置き換えた。作業は何度もデータを往還して確認を繰り返した。そして、大学院生の要旨作成の意識と課題を考察した。

3. インタビューのコーディング結果

抽出されたカテゴリーは、<1.要旨について><2.要旨の作成過程><3.要旨作成上の困難点>の 3 大カテゴリーに分類された。以下、各大カテゴリーのコードについて述べる。

表 1 に示す<1.要旨について>の大カテゴリーから、調査協力者は、要旨を本文の概要を伝えるものであるという意識で要旨を作成していることが明らかになった。なお、[1-1.要旨の役割]については、大半の学生の認識が共通していた(【a】 【b】)。

表 1 <1.>のカテゴリーとコードの対応表

カテゴリー	コード
[1-1.要旨の役割]	【a.内容をわかりやすく伝える】 【b.論文を読まなくても概要がわかる】 【c.自分にとって論文が必要かどうか判断する】
[1-2.要旨に必要な内容]	【d.オリジナリティーを示す】 【e.筆者の主張を示す】
[1-3.要旨の読み手]	【f.研究者が読む】

※1 早稲田大学日本語教育研究センター助手

表2 <2.>の категорияとコードの対応表

カテゴリー	コード
[2-1.作成ストラテジー]	【g.論文の見出しを使う】【h.本文の構成に沿って書く】【i.他の論文要旨を真似る】【j.重要語をピックアップする】
[2-2.留意点]	【k.自然な流れを意識して書く】

表2に示す<2.要旨の作成過程>の[2-1.作成ストラテジー]のカテゴリーからは、【g.論文の見出しを使う】【j.重要語をピックアップする】等、自分の言葉に言い換えずに要旨を作成していることが明らかになったが、表3に示す<3. 要旨作成上の困難点>に、【l.本文の考察のまとめ方がわからない】【m.本文のコピペになってしまう】とあるように、[2-1.作成ストラテジー]は[3-1.要約]上の困難点を解決するために行っていた。これは、どのように本文を要約するかといった要旨の論文スキーマが未形成の状態で作成していたことが要因として考えられる。[2-2.留意点]では、【k.自然な流れを意識して書く】というコードが抽出されたが、一方で、<3.>で【r.結果と考察のつながりが難しい】【s.読みやすい流れになっているか不安】とあるように、

表3 <3.>の категорияとコードの対応表

大カテゴリー	カテゴリー
[3-1.要約]	【l.本文の考察のまとめ方がわからない】【m.本文のコピペになってしまう】
[3-2.構成要素の分量]	【n.構成要素の量のバランスが難しい】【o.短くなりすぎてしまう】【p.字数が越え、何を削ればいいのかわからない】
[3-3.日本語表現]	【q.アカデミックな表現がわからない】
[3-4.構成要素の接続関係]	【r.結果と考察の繋がりが難しい】【s.読みやすい流れになっているか不安】
[3-5.要旨の構成要素]	【t.要旨の構成要素がわからない】

学生の課題にもなっていた。他に困難点として、【n.構成要素の量のバランスが難しい】等、要旨に書く構成要素の分量に関するコードも抽出された。

4. まとめ

本研究では、日本語教育学専攻の大学院生の要旨作成とインタビュー調査から、要旨作成の意識と課題を分析した。要旨の役割の認識はあるものの、困難点として、①本文から要旨への要約、②構成要素のつながり、③各構成要素の分量といった要旨の論文スキーマの欠如から発生する課題が挙げられた。

前述の通り、従来の要旨研究では、要旨のみを分析し、何をどう書くかといった構成と表現を探ったものが主であったが、本研究により、原文である本文のどの要素をどれくらいの分量で要約し、どのように表現しているかの研究やその教授法を探る必要性が示唆された。

(ayaka.m@aoni.waseda.jp)

注

注1 要約文の一種で、「原文の主題や結論に焦点を絞り、原文の表現形式に捕らわれずに、自分の言葉で要点をまとめたもの」(佐久間編著 1994:4)である。

注2 指定した研究論文は、学会誌『日本語教育』に掲載され、林大記念論文賞を受賞した上野(2013)である。

参考文献

- 1)上野美香:介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題—日本人介護職員の視点からの分析と課題提起—, 日本語教育, 156, pp.1-15 (2013)
- 2)佐藤郁也:質的データ分析法 原理・方法・実践, 新曜社 (2008)
- 3)佐久間まゆみ:要約文の表現類型—日本語教育と国語教育のために—, ひつじ書房 (1994)
- 4)三谷彩華:日本語教育学の論文要旨の文章構造における文体特性, 文体論研究, 63, pp.57-68 (2017)
- 5)村岡貴子:専門日本語ライティング教育 論文スキーマ形成に着目して, 大阪大学出版会 (2014)
- 6)李国棟・王晶:学術論文要旨のテキスト性についての日中対照研究, 日本言語文化研究, 15, pp.32-44 (2011)

日本語による法学ライティングの協働授業を振り返る 教師の語り

—SCAT による分析から見えてくること—

Teachers' Collaboration for Juristical Writing in Japanese: An Analysis with SCAT

○宮島 良子^{※1}
MIYAJIMA, Ryoko

金村 マミ^{※2}
KANEMURA, Mami

キーワード：協働、法学ライティング
Keywords: Collaboration, Juristical Writing

1. はじめに（背景および目的）

名古屋大学は法整備支援の一環として、開発途上国等に日本語による日本法教育の機関（以下、当該機関）を設置し、教育活動を行ってきた。当該機関の学生は現地大学の法学部等に在籍し、現地法を学びながら、一般的な日本語教育に加えて、法学分野の専門日本語、「日本史・公民・日本法」などを学んでいる。しかし、10年以上教育活動を続ける中で法学学習の基盤となる「法的リテラシー^{注1}（大村・土井 2009）」を養う授業が現地大学で行われていない場合、日本語で法学を学ぶ際に困難が伴うことが明らかになった（レイン他 2019）。そのため日本語教育にも法学教育的要素を取り入れるなど双方の連携が求められているが、法学分野と日本語教育との協働研究は管見の限り少ない。

本調査の目的は、法学分野との連携が必要な日本語教育の現場において、協働者間で何が起きるのか、何に留意すべきであるのかを探ることにある。

本調査は、当該機関に勤務する、法学講師 1 名と日本語講師 1 名を対象に実施した。この法学講師（以下、講師 L）と日本語講師（以下、講師 J）は、「法的リテラシー」等を身につけさせることを目的に法学ライティングの協働授業を実践した（レイン他 2019）。この協働授業に関してインタビューを行い、振り返ってもらった。その語りのデータを SCAT（大谷 2019）の分析手法を用いて質的に分析した。

2. 方法

本協働授業の実践は、以下の手続きで実施された。
①課題テーマを講師 L が選定する②講師 J が意見文を書かせる③学生が書いたものを元に講師 L が法学で期待される意見文の型に落とし込みながら講義をする④③を元に講師 J が再度同じテーマで書かせる
本調査では、講師 L、講師 J に対して、上記の協働授業の実践の経験をそれぞれ別々に振り返る半構造化インタビューを行い、そこで得られたプロトコルデータをもとにコード化を行った。分析は、当該機関での勤務経験を有する日本語講師 2 名で行った。

3. 結果および考察

講師 L からは 43 のコード、講師 J からは 38 のコードが抽出された。以下、そのストーリーラインや理論記述を比較し、一部抜粋して主な 2 つの特徴について紹介する。（下線はコード）

【法学教育・法学的思考プロセス】

講師 L は、大学の法学教育は、現状、非明示的な教育スタイルが取られることが多く、経験を通して得た法学ライティングのパターン分析を行った結果、法学ライティングの傾向として、字数を意識した構成などのテクニックや法学ライティングにおける読み手意識があるものの、司法試験のためのライティング教育にとどまっていると考えている。また、内省による法学的思考の顕在化が起こっており、法学学習経験者からみた異分野ライティングの評価としては、法学的思考プロセスが日本語教育に不足して

※1 名古屋経済大学経営学部准教授

※2 名古屋大学カンボジア日本法教育研究センター講師

いる点であると考えている。一方の講師 J は、法学的思考プロセスに対する驚きを感じているが、その驚きは特に法学ライティングにおける反駁の重要性に向けられている。講師 L の反駁の取り扱いに対する振り返りに触発されるように、講師 J 自身の反駁の取り扱いに対する振り返りが行われ、反駁の取り扱いに対して、これまではあまり重視していなかったことを自覚するようになった。

【協働による相互理解】

講師 L は協働を通して内省したことによる学びや気づきがあった。まず自身の主張を書き、その後、その理由を書くという演繹型の書き方をすることについて異分野ライティングとの共通点は認めているものの、説得的であるかについては専門性による相違の認識を持ち、法学学習経験者からみた異分野ライティングとして、日本語教育との乖離を感じている。また、講師 L 自身は相互学習環境への意識や学習環境 (ICT) 整備への意識はあるものの、学生の自主性に任せる姿勢が強くあり、講義型授業を提供し、学生自身がその学びをどのように活かすのかについては学習者オートノミーに任せている。また、専門性の重視から、分業意識があり、授業分担として任せた部分については踏み込まない。一方の講師 J は、協働授業を通して、法学分野で重視される思考力への理解が深まっており、法学講師の求める到達目標の受容過程にある。協働授業以前は分業意識があり、意見文の型を教え、期待する文字数をクリアできていることを学生が目指すべき最低限の到達目標としていたが、協働授業を通して法学的思考プロセスの存在を認識するに至った。また、講師 J は双方向授業の教授方法について日本語教育の専門家としての提案を行えたことで、日本語教育の専門家としての自負を持ち、協働授業の可能性への期待を持つようになっている。

以上、法学的思考プロセスに沿った反駁が重視されること、異分野と協働することは相互に自分分野を分析的に捉え直す契機となることなどが示唆された。

同時に、講師 L からは思考を測るための出題条件として、法学未習者への配慮や異文化理解が重要で

あるという意識や教授内容についての言及はあったが、教授方法へ言及は確認されなかった。これは、小畑他 (2018) が「法学の教師は、教育学の知識を身につけていない、それが重要だという意識も自分たちが学ぶ上で持たされてこなかった」と指摘している、法学教育の抱える問題点であり、講師 J がそのことに日本語教師としての存在意義を見いだしていることから、この認識のずれが摩擦や対立を生む可能性があり、協働の難しさの一因となりうる。

4. おわりに

本調査では、それぞれ 1 名ずつのデータではあるが、協働する両者がどのように異分野を認識し、自分分野を捉えなおしながら業務を遂行しようとしているのかが確認された。日本語による法学ライティングの教育が開発途上であり、特に教育方法についての認識のずれが認められたことから、協働授業の際に事前にこの点について話し合うことを提案したい。

注

注 1 「自分の意見を明確に述べ、また他人の主張を公平に理解しようとする姿勢・能力」等のことである。詳細については (大村・土井 2009) を参照されたい。

参考文献

- 1) 大谷尚：質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで、名古屋大学出版会 (2019)
- 2) 大村敦志・土井真一：法教育の目指すもの-その実践に向けて-、商事法務 (2009)
- 3) 小畑郁・瓦井由紀・宮島良子・杉田昌平・上地一郎：座談会 アジアでの日本法教育の新段階：日本法教育研究センター事業 10 年余の経験から (小特集 アジアにおける日本法教育：「日本法教育研究センター」10 年の回顧と展望)、法律時報, 90 (3), pp.60-69 (2018)
- 4) レイン幸代・玉垣正一郎・宮島良子・金村マミ：法学分野のライティング指導：『意見文を書く』授業における法学講師と日本語講師の協働実践、マレーシア国際日本語教育研究発表会予稿集 (2019)

介護施設における 日本人のコミュニケーション講座の試み

A Workshop for Japanese Workers in A Nursing Facility to Communicate with Foreign Technical Interns

星 摩美^{※1}
HOSHI, Mami

キーワード：介護技能実習生、日本語母語話者、コミュニケーション、やさしい日本語
Keywords: Nursing Caregiving Interns, Japanese Native Speaker, Communication, Easy Japanese

1. はじめに（背景および目的）

2017年、技能実習生制度に「介護」の分野が加えられた。介護は、チームケアによる対人サービスで他職種との連携とコミュニケーションが前提であること等から日本語要件が設けられている(2015 外国人介護人材受入れの在り方に関する検討会)。介護においてコミュニケーションが必須であるなら、外国人に日本語能力を求めるだけでは、コミュニケーションは成立しない。EPA 候補者受け入れ機関からも受け入れ側の、外国人とのコミュニケーション能力の必要性が言及されている(日本介護福祉士会 2017、2018)が、現在は技能実習責任者の講習(3年ごと30分)が義務となっているだけである(出入国在留管理庁・厚生労働省 2019)。

母語話者と非母語話者とのコミュニケーション手段として「やさしい日本語」が注目され、日本語母語話者向けの研修も実践報告されている(梶田 2019等)。本研究では、初めて技能実習生を受け入れることにした介護施設Aで行った外国人とのコミュニケーション講座について、実践内容とやさしい日本語でのコミュニケーション導入練習場面の録画と成果物の分析から介護分野での課題について報告を行う。

2. 実践の概略と研究の方法

実践は、技能実習生が実習を行う際、同じ現場で働く予定の介護職員56名を対象に2019年8月20日(29名)と29日(27名)の2日に分け、各3時間でほぼ同じ内容で行った。内容は、日本における外国人の背景、日本語能力試験N3、N4レベルの日本語力、

やさしい日本語を使用したコミュニケーション、異文化適応と問題解決の方法の4つを扱った。やさしい日本語でのコミュニケーション研修では、梶田(2019)、弘前大学人文学部社会言語学研究室ホームページを参考に介護分野の例文等を使用し、表1の通り行った。本研究では、8月20日に録画した表1中①の(2)発表と③の(3)意見交換部分、③で作成したポスター10グループ分の成果物を対象に検討する。

3. 結果および考察

まず、①の(2)発表では、日常の業務上、意識的に話し方を変えているためか、外国人以外の場面設定では話し方の違いに関するコメントが多く出ていた。しかし、外国人場面では、「丁寧に、ストップしながら、ジェスチャー付きで」話したというコメントが見られた反面、外国人のイメージを具体化できず、会話が中断するグループもあり、「どう伝えたいかわからなかった」というコメントも見られた。

③のポスター作成では20日はA 感染性胃腸炎、29日はB 熱中症についてグループで書き換えを行い、その結果、3つの課題が観察された。

1点目は、伝える情報の選択に関わるもので、Bの例では、具体的にわかりやすくするために、原文にはない室温や水を飲む回数などの情報が足されていた。しかし、Aの例では、介護施設という文脈では、不必要な「特に学校、保育所、高齢者施設および医療機関等の施設」という情報が残されている例が5グループ中2例見られた。

2点目は、行為者が誰であるかが伝わりにくい例

^{※1} 福井ランゲージアカデミー鯖江 主任講師

表1 やさしい日本語でのコミュニケーション研修の内容と流れ ()は20日の実施時間を表す

① ウォーミングアップ(20分) 目的:相手によって言語調整をしていることを意識化するため	内容と流れ(実施時間): (1)4場面のロールプレイ(8.1分) グループワーク3人:2人はロールプレイ、1人は話し方の観察者 ロールプレイ場面:「住んでいる町のいいところ」について話す 2人の関係:4種類-初対面同士、仲のいい友人同士、高齢者と、外国人と (2)話し方の違いについて発表(8.5分)	③ 書き言葉のやさしい日本語(29分) 目的:実践を通して理解を深め、やさしい日本語の使用につなげる	内容と流れ(実施時間): (1)やさしい日本語を使って、ポスターを作成する(6.5-13分) グループワーク:5、6人 内容:市からの注意喚起(A 感染性胃腸炎、B 熱中症の2種*)のお知らせ (2)ポスターの展示(10.5分) (3)意見交換、書き換えポイントのまとめ(8分)
② やさしい日本語とは(27分) 目的:やさしい日本語とは何か理解し、練習する	内容と流れ(実施時間): (1)概要の説明(7.3分) (2)単語、単文、複文の言い換え練習(18.3分) 近くの人と相談(6.8分) →発表意見交換(11.5分)	④ 話し言葉のやさしい日本語(35分) 目的:実践を通して理解を深め、やさしい日本語の使用につなげる	内容と流れ(実施時間): (1)やさしい日本語を使って、ニュース(大文字焼き)を説明(8.5分) (2)発表(3.1分) (3)話したり聞いたりするときのポイントのまとめ(13.2分)
*A 感染性胃腸炎原文 (注意:例年の傾向から、5月頃までは感染性胃腸炎の流行が続くことが予想され、特に学校、保育所、高齢者施設および医療機関等の施設においては、石けんを使った十分な手洗い、嘔吐物の適切な処理および食品の十分な加熱などの対策が徹底されなければ、感染症の集団発生や食中毒が多発することになります。) B 熱中症原文 (注意:のどがかかわなくても、こまめに水分補給をしましょう。部屋の温度、湿度をこまめに測り、扇風機やエアコンを使って温度調節をするよう心がけましょう。)			

が見られた。水分補給と温度調節が指示されている原文Bは読み手すべてが動作主だが、文脈が介護施設になると「水を飲む」のは施設の利用者であり、「温度を測る」のは介護職員となる。誤解を防ぐよう動作主を明示するためには授受、もしくは使役の表現が必要になるが、書き換えでは「水分を何回も飲んで下さい」「部屋の温度・湿度を測って下さい」とだけあり、動作主が不明確になっている。

3点目は、指示の表現形式で、「～てください」のほかに、「石鹸を使い丁寧に手を洗う」「1時間に1回コップに一杯の水を飲みましょう」という書き換えが見られた。辞書形や「ましょう」の指示を示す機能は、初級レベルでは明示的に学習項目となっているものはほとんどなく、N3, N4 レベルで来日する技能実習生は理解できない可能性がある。

4. まとめと今後の課題

実践で得られたデータをもとにやさしい日本語でのコミュニケーションの課題を検討した。これまでの先行研究(植木 2006 等)でも指摘されてきたことであるが、情報の精査の難しさと、やさしい文法形式を選択することで正確に伝わりにくくなるという現象が今回も見られた。また、西尾(2015)にも指摘があるが、形式だけでなく機能に目を向ける必要性も再確認された。表現の簡略化と正確さを共存させるためには、N3, N4 レベルの語彙や文法、機能の把

握等が必要で、短時間の研修だけでは難しいことが再確認された。技能実習生受け入れの場での誤解は事故等にもつながる。やさしい日本語でのコミュニケーションを広めていくためには、必須となる表現や機能を特定する作業が必要である。また、技能実習生の円滑な受け入れのためには、受け入れ側に対する研修の機会と時間の確保が望まれる。

(m.hoshi@fla.ac.jp)

参考文献

- 1) 植木正裕:外国人への災害時情報伝達における「わかりやすさ」とその問題点,言語処理学会第12回年次大会発表論文集,20-23(2006)
- 2) 公益社団法人日本介護福祉士会:介護分野の技能実習生の実習実施者の日本語学習指導者向け手引き(2018)
- 3) 出入国在留管理庁・厚生労働省編:技能実習制度運用要領～関係者の皆さまへ(2019)
- 4) 西尾広美:幼稚園の配布文書に使われている文法項目の特徴:幼稚園における「やさしい日本語」のガイドライン作成を目指して,日本語研究,35,85-98(2015)
- 5) 弘前大学人文学部社会言語学研究室:
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/index.html>
2020年1月5日最終閲覧
- 6) 榊田直美:やさしい日本語の使い手を養成するー自治体職員対象の「やさしい日本語研修」の実践から,庵功雄・岩田一成・佐藤三三『やさしい日本語』と多文化共生』,145-159(2019)

口頭発表

マンガ学部専門授業の語彙・表現調査報告

Research Report about Vocabulary and Expressions Used in Faculty of Manga Classes

宿利 由希子^{※1} ○住田 哲郎^{※2} ○小柴 裕子^{※1}
SHUKURI, Yukiko SUMIDA, Tetsuro KOSHIBA, Yuko

キーワード：カタカナ語、オノマトペ、慣用句、俗語、役割語

Keywords: Katakana words, Onomatopoeia, Idioms, Slang words, Role Language

1. はじめに（背景および目的）

発表者らの所属する京都精華大学は、年々留学生が増加しており、特にマンガ学部は新入生の約3分の1を留学生が占めている。専門授業の担当教員やティーチング・アシスタント（以下 TA）からは、「留学生の提出する課題が求めたものと違うことが多い」「留学生が授業の進度についてきていない」といった、留学生の日本語力にかかわる不安の声も増えている。このような状況から、新入留学生の必修科目である日本語授業を少しでも専門授業に役立つ内容にすること、学内教師研修において専門授業の担当教員たちに状況改善につながる情報を提供することが求められている。このような状況を受け、本発表は、留学生の多いマンガ学部の専門授業（以下マンガ授業）で扱われる語彙・表現のうち、新入留学生が理解しにくいのはどのような語彙・表現かを明らかにすることを旨とする。

2. 調査概要

まず、マンガ授業で使用されている語彙・表現を用い、理解度調査を行った（調査1）。マンガ授業の講義部分を5回（計245分）収録したデータから、日本語授業を担当している発表者ら3名が、日本語授業で扱っておらずかつ新入留学生にとって理解困難と考えられる語彙・表現を各自選定した。2名以上が共通して選定した語彙・表現のうち、特にマンガ授業の理解に必要と思われるものを話し合いにより152個選定し、マンガ学部の専門教員3名の確認を受けた。これらの語彙・表現を用い、マンガ学部

新入留学生45名（中国語母語話者25名、韓国語母語話者17名、その他3名）を対象に理解度を測る質問紙調査を行った。新入留学生の日本語レベルは、日本語能力試験N2合格程度またはそれ以上である。同時に、これらの語彙・表現が母語話者に理解されているかを調べるため、マンガ学部1年生の日本語母語話者学生5名にも同様の調査を行った。質問紙では、聞いたことがない場合「まったく知らない」を、聞いたことはあるが意味を知らない場合「あまり知らない」を、意味を知っていると思うが自信がない場合「まあ知っている」を、よく意味を知っている場合「よく知っている」を選ぶよう指示した。

次に、マンガ授業のTA6名（日本語母語話者3名・非母語話者3名）による半年間の報告書から、新入留学生がTAに質問した語彙・表現を抜き出し、これらと調査1の理解度調査で新入留学生の多くが「まったく／あまり知らない」と回答した語彙・表現を比較した（調査2）。

3. 結果および考察

調査1の結果、日本語授業では扱わないカタカナ語、オノマトペ、慣用表現・決まり文句、俗語に関して、新入留学生の理解度が低いことが明らかになった。理解度調査に用いた表現について、50%以上の新入留学生が「まったく／あまり知らない」と回答した個数と、日本語母語話者学生が1名以上「まったく／あまり知らない」と答えた個数を表1に示す。表1から、カタカナ語、慣用表現・決まり文句、その他の表現は新入留学生だけでなく日本語母語話者学生の理解度も低い表現がある一方、オノマトペ、俗語は日本語母語話者の理解度が高く、新入留学生

※1 京都精華大学共通教育機構特別任用講師

※2 京都精華大学共通教育機構講師

表1 「まったく／あまり知らない」回答表現数

	新入留学生	日母生
カタカナ語	23/65(個)	12/65(個)
オノマトペ	13/37(個)	0/37(個)
慣用表現・決まり文句	16/22(個)	4/22(個)
俗語	10/14(個)	0/14(個)
その他	4/14(個)	1/14(個)
計	66/152(個)	17/152(個)

※「日本語母語話者学生」を「日母生」と略記

※数字は回答表現数/調査票に記載した総数

の理解度が低い表現があることがわかる。新入留学生の理解度が低い例として、カタカナ語「ルポ（45名中38名）」、オノマトペ「とげとげ（45名中34名）」、慣用表現「蚊帳の外（44名中37名）」、俗語「わりかし（45名中36名）」、その他「かいつまんで（45名中36名）」が挙げられる（数字は有効回答者数と「まったく／あまり知らない」と回答した新入留学生の人数）。

調査2の結果、役割語について9件、オノマトペについて3件、カタカナ語1件、その他（助詞、名詞化など）1件の質問があり、新入留学生にとってこれらの理解や適切な使用が困難であることがわかった。役割語とは、「老博士」なら「そうじゃ、わしが知っておる」、「お嬢様」なら「そうよ、わたくしが存じておりますわ」といった、人物像と結びついた言葉遣いであり（金水 2003）、マンガなどの登場人物の台詞によく用いられる。

以上の結果から、スポット的な語彙・表現の収集および理解度調査（調査1）と長期的な語彙・表現の収集（調査2）から、共通してオノマトペの理解が新入留学生にとって困難であることが明らかになった。一方、カタカナ語、慣用表現・決まり文句、俗語、役割語については調査1、2で結果に違いが見られた。これは、調査1の収録データとして授業の講義部分のみを用いていたのに対し、調査2では講義部分以外に実習時間も含んでいるためと考えられる。特に、役割語に関する質問が寄せられたのは、マンガを実際に描く実習時間においてであった。

カタカナ語やオノマトペ、慣用表現、役割語は、日本語母語話者間で一般的に用いられているのに対し、日本語学習者にとっては習得が困難であることが従来指摘されている（ミン・佐野 2001；陣内 2008；鄭 2011；家坂他 2014）。俗語教育の必要性に関する指摘は管見の限り見当たらないが、マンガという一般大衆向けコンテンツの作成には、日本語教育界がすでに目を向けているカタカナ語やオノマトペ、慣用表現、役割語だけでなく俗語も今後の日本語授業で扱っていく必要があるであろう。

4. おわりに

本発表では、マンガ授業で扱われる語彙・表現のうち、新入留学生が理解しにくいのはどのような語彙・表現かを明らかにするため、スポット的な語彙・表現の収集および理解度調査と、長期的な語彙・表現の収集を行った。その結果、マンガ授業で扱われるカタカナ語、オノマトペ、慣用表現・決まり文句、俗語、役割語が新入留学生にとっては理解困難であることが明らかとなった。本研究の知見は、今後日本語授業の内容に反映させるとともに、教師研修で専門授業担当教員たちに共有していく予定である。

(shukuri@kyoto-seika.ac.jp)

参考文献

- 1) 金水敏：ヴァーチャル日本語 役割語の謎，岩波書店（2003）
- 2) ミン ダニー・佐野洋：日本語学習者のための慣用句データベースの作成：統計処理を用いた一手法の提案，情報処理学会研究報告コンピュータと教育，62，pp.55-62（2001）
- 3) 陣内正敬：日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育，言語と文化，Vol. 10，pp.47-60（2008）
- 4) 鄭惠先：役割語を主題とした日韓翻訳の実践，役割語研究の展開，くろしお出版，pp.71-90（2011）
- 5) 家坂光弥・内田ゆず・米山淳：日本語学習者のオノマトペ学習を支援するタブレット端末用アプリケーションの開発と有効性の評価，日本知能情報ファジィ学会ファジィシステムシンポジウム講演論文集，Vol.30，No.0，pp.632-637（2014）

医療現場における業界用語の使用状況

—外国人看護師の学習支援に向けて—

The conditions of medical argot usage:

Towards the learning support of foreign nurses

ポポヴァ エカテリーナ^{※1}

POPOVA, Ekaterina

キーワード：医療現場、看護師、業界用語、使用状況

Keywords : medical setting, nurses, argot, the usage conditions

1. はじめに

現在の日本では、経済連携協定(EPA)に基づき、インドネシア・フィリピン・ベトナムからの看護師候補者が受け入れられている(厚生労働省 2017)。そのような看護師候補者は日本の看護師国家試験への合格が必須であり、高度な日本語能力の獲得が求められる。一方、医療現場では、専門用語に加え、同僚同士でのみ使用する業界用語も存在する。業界用語は、「ある職業的集団に共通して使用される職業上の通用語であり、主に職業上の利便性のために、あるいは遊び心で発生した言葉である」(米川 2009: 19)。それらの中には、理解困難な用語があり、医療事故をまねく危険性が内在している(桐田他 2007)。しかし、現状では、それらを調査した研究はわずかで、日本語教育学の観点から外国人看護師への学習支援を目的とした業界用語の使用場面や使用頻度については研究されていない。そこで、本研究では、医療現場での職務遂行に必要な業界用語の使用状況を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

2019年11月に大阪府のA地域包括支援センターの様々な診療科に勤務する10名の看護師を対象に、アンケートによる予備調査を行った。続いて、その調査票を修正し、2019年12月に施設や診療科を限定せず、関西地区の医療施設に3年以上の勤務経験がある看護師40名を対象に本調査を行った。両アンケート調査ではまず、江藤他(2002)や米川(2009)などの先行研究で紹介された業界用語や、インターネット上の医療業界用語辞典および医療関係者によるブログも参照した上で、協力者の負担を考慮し、65語の業界用語を無作為に抽出して調査票に掲載した。抽出した語の使用頻度について「よく使っ

ている」、「時々使っている」、「あまり使わない」、「使わない」の4段階で回答を依頼した。また、業界用語使用の場面、意図、相手などについても回答を求めた。

3. 結果および考察

3.1 業界用語の使用実態

予備調査では、医療現場での業界用語一般の使用頻度については、10名中「よく使う」が5名(50.0%)、「時々使う」が5名(50.0%)であった。本調査では、40名中「よく使う」が24名(60.0%)、「時々使う」が12名(30.0%)、「あまり使わない」が4名(10.0%)であり、「使わない」との回答はなかった。両調査の結果から、業界用語は頻繁に使用されており、医療現場に入る看護師は業界用語との接触が不可避であることが考えられる。

予備調査では、本研究で抽出した65語のうち、「アナムネ(病歴)^{注1}」などの26語が10名中8名によって使用されていた。これに対して、「シュワング(妊娠する)」などの24語は、10名中8名以上が「使わない」と回答した。予備調査のデータは、一つの施設に限定されており、医療業界全般の傾向としては断定できない。そこで、データを拡大した本調査では、施設や診療科を限定しないこととした。その結果、医療業界で広く使用されている業界用語が存在する一方、医療施設と診療科の専門性などにより異なる用語もあることが判明した。広く使用されている業界用語は、「心マ(心臓マッサージ)」などの18語であった。40名中35名以上がそれらの用語を頻度にかかわらず、「使う」と回答した。これに対して、「ベニ(良性である)」などの13語は、40名中35名以上が「使わない」と回答したため、それらは特定の施設や診療科のものであることが考えられる。その他に、特定の診療

^{※1} 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

科で使用される用語として、手術室の看護師である 6 名全員が「インオペ（手術不可能の状態）」を「よく使う」と回答した。また、自由記述欄には、6 名中 4 名は「手洗い（機械出し看護師）」、2 名は「電メ（電気メス）」を記入した。それらの用語は手術室での勤務に関するものであり、特定の診療科の特殊なものと言える。

3. 2 業界用語が使用される状況

業界用語の使用状況についてはまず、協力者に「どのような場面で業界用語をよく使うか」と尋ねた。その結果、予備調査では、「申し送り」10 名、「処置中」4 名、「指示する時」3 名、「指示される時」2 名、「記録」2 名、「職場外での会話」1 名という順で回答が得られ、「その他」として「看護師同士の会話」の記述もあった。そこで、本調査では、「指示」という選択肢を省略し、「職場内での同僚の会話」という選択肢を追加した。その結果、「職場内での同僚の会話」39 名、「申し送り」30 名、「処置中」20 名という順で回答が得られた（表 1）。「職場内での同僚の会話」の回答が最も多く、業界用語は勤務中のみならず、同僚間で会話する際にも使用されることが分かった。そのため、業界用語に関する知識は外国人看護師にとって同僚との会話にも不可欠になると考えられる。

また、業界用語の使用相手については、予備調査では、「誰に対して業界用語を最もよく使うか」と「誰から業界用語を最もよく言われるか」という両質問に対して 10 名全員が「看護師」と回答した。これに対して、本調査では、「誰に対して業界用語を最もよく使うか」の質問に対して 40 名中 34 名は「看護師」、6 名は「医師」と回答し、「誰から業界用語を最もよく言われるか」への回答として、27 名は「看護師」、13 名は「医師」を選択した。以上から、看護師にとっては普段、業界用語の使用相手は看護師であるが、医師からも使用されることも分かった。

表 1 業界用語が使用される場面（複数回答可）

回答の選択肢	回答者の人数 (%)
職場内での同僚の会話	39 (97.5%)
申し送り	30 (75.0%)
処置中	20 (50.0%)
職場外での同僚の会話	14 (35.0%)
記録	8 (20.0%)
その他	0 (0.0%)

表 2 業界用語使用の意図（複数回答可）

回答の選択肢	回答者の人数 (%)
短くて伝えやすいから	36 (90.0%)
他の同僚が使用するから	16 (40.0%)
時間短縮のため	11 (27.5%)
患者や家族が理解できないように	5 (12.5%)
仕事上のストレスを緩和できるから	2 (5.0%)
かつこいから	1 (2.5%)
仲間意識が高まるから	0 (0.0%)
その他（発表にて提示）	4 (10.0%)

さらに、業界用語使用の意図については、予備調査では、「簡単で使いやすい」10 名、「時間短縮のため」5 名、「他の同僚が使用するから」3 名、「患者や家族が理解できないように」1 名という順であった。本調査では、「簡単で使いやすい」を「短くて伝えやすい」と修正した。その結果は、「短くて伝えやすいから」が 36 名、「他の同僚が使用するから」が 16 名、「時間短縮のため」が 11 名という順であった（表 2）。以上の結果から、「簡単で使いやすい」と「短くて伝えやすいから」を理由にした回答が最も多く、多忙な医療現場では、業界用語は主に情報の迅速な伝達のために使用されるものと言える。次に「他の同僚が使用するから」の回答が多く、「その他」として「その職場の共通言語になっているから」などの記述もあった。既に業界用語が使用されている現場に入る新人看護師は、業界用語を同僚とともに日常的に使いながら、それを現場の「共通言語」として認識し、適切に使用していく必要があると言える。

4. まとめと今後の課題

以上から、業界用語は医療現場の様々な状況で必然のコミュニケーションの道具として機能するため、外国人看護師にとっては習得すべき重要な表現であると言える。今後、引き続きインタビュー調査を行う予定である。

(popova.ekaterina_islu@mail.ru)

注

注 1 () 内の意味は、江藤他 (2002) や米川 (2009) および協力者の回答にあったものである。

- 1) 江藤裕之・岸利江子・岩崎朗子・坂本ちより・頭川典子・青木三恵子・久保田智恵・杉浦絹子・八尋道子：医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察，長野県看護大学紀要，第 4 号，pp. 31-39 (2002)
- 2) 桐田久美子・岡崎寿子・八代利香・宮内信治・Gerald T.：臨床現場における外来語・略語・隠語の使用状況と看護師の認識，日本農村医学会雑誌，第 55 巻，第 6 号，pp. 610-617 (2007)
- 3) 厚生労働省：インドネシア、フィリピン及びベトナムからの外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れについて，<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite> (2017) (2020 年 1 月 3 日閲覧)
- 4) 米川明彦：集団語の研究，東京堂出版 (2009)

学術共通語彙に関する音声知識と文字知識の違い

— 中国語および韓国語を第一言語とする日本語学習者に焦点を当てて —

The Gap in Knowledge between Spoken and Written Japanese Common Academic Words:
Focusing on Chinese and Korean Learners of Japanese

○佐藤 尚子^{※1} 松下 達彦^{※2} 笹尾 洋介^{※3} 田島 ますみ^{※4} 橋本 美香^{※5}
SATO, Naoko MATSUSHITA, Tatsuhiko SASAO, Yosuke
TAJIMA, Masumi HASHIMOTO, Mika

キーワード：学術語彙、学術共通語彙テスト、音声モード、文字モード

Keywords: academic words, Japanese Common Academic Word Test, spoken mode, written mode

1. はじめに

大学の講義や教科書には、専門用語のほかに、分野に関わらず学術的な文脈で用いられる学術共通語彙が高頻度で現れる。これらの学術共通語彙の理解は、日本の大学で学ぶ留学生には必須である。日本語の学術共通語彙は漢語の出現頻度が高いため（松下 2011）¹⁾、文字モードによるテストでは、漢字圏の学生が高得点を獲得する傾向にある（松下ほか 2016, 2018）²⁾³⁾。しかしながら、同じ学術共通語彙を聞いたときに同じように理解できるのか疑問がある。そこで本研究グループでは、文字版と同じ問題を使用した音声版のテストを開発した。研究課題は文字リテラシーの高い中国人学生および韓国人学生は音声モードの日本語学術共通語彙を文字モードと同程度に理解できるか、である。

2. 日本語学術共通語彙テスト (Version 2.3)

本発表で取り上げる学術共通語彙とは、一般的なテキストに比べて学術的なテキストでより高い使用率を占める語彙を指す。松下（2011）が日本語の大規模書き言葉コーパスから計量的な手法によって抽出した「日本語学術共通語彙リスト」をもとにテスト開発を行った⁴⁾。今回はVersion 2.3を使用した。

テストの対象語は一般語彙も含めた総合的なデー

タベースにおける使用頻度順位を基準に選定した。頻度順位上位 2 万語の中から 250 語に 1 語を抽出することとし、可能な限り頻度順位が等間隔に近づくように抽出した。そのように抽出した 75 語を対象語とした。テストの形式は、対象語と対象語を含む文を示した後、3 つの選択肢から最も意味が近いものを選ぶ形式である。音声版と文字版は、問題項目は同じだが、出題項目はそれぞれランダムに配列されている。

3. テストの実施

2019 年 8 月～9 月にかけて、韓国で日本語予備教育を受けている韓国人学生 99 名および中国の大学で日本語を主専攻とする学生と第一外国語として学ぶ中国人学生 51 名（朝鮮族の高度な中朝バイリンガル 3 名を含む）、計 150 名に実施した。最初に音声版（20 分）を用いて対象語を伏せた問題用紙を見せ、解答を選ばせた。5 分休憩したのち、文字版（20 分）を実施した。

4. 結果および考察

解答の内的一貫性を示すクロンバック α は音声版が $\alpha = .91$ 、文字版が $\alpha = .88$ で、十分な信頼性のあるテストであった。

テスト結果の基礎統計量を表 1 に示す。1 問 1 点とした 75 点満点のテストで、全体の平均（標準偏差）は音声版が 45.4 (12.5)、文字版が 58.0 (11.2) であった。韓国の学生の平均（標準偏差）は音声版が 49.1 (12.1)、文字版が 57.9 (12.4) で、中国の学生は音

※1 千葉大学国際教養学部教授

※2 東京大学大学院総合文化研究科教授

※3 京都大学国際高等教育院准教授

※4 中央学院大学法学部教授

※5 川崎医科大学医学部准教授

表1 日本語学術共通語彙テストの基礎統計量

(75点満点)		平均	最高	最低	標準偏差
全体 (150名)	音声版	45.4	73	10	12.5
	文字版	58.0	73	8	11.2
韓国人 (99名)	音声版	49.1	73	10	12.1
	文字版	57.9	73	8	12.4
中国人 (51名)	音声版	38.4	64	14	10.0
	文字版	58.1	69	39	8.1

音声版が 38.4 (10.0)、文字版が 58.1 (8.1) で、どちらの学生も音声版の平均が低かったが、その差は中国の学生のほうが大きく、分散分析の結果、統計的に有意な交互作用が検出された ($F(148)=86.8$, $p<.01$)。音声版と文字版の得点のピアソンの相関係数は韓国の学生が $r=.766$ 、中国の学生が $r=.558$ で、韓国のほうが有意に高かった ($r=2.150$, $p<.05$)。韓国人、中国人学生ともに音声版の平均点が低かった

表2 韓国人学生：音声版の正答率が文字版の正答率を下回っている語 (6語)

項目	正答率(%)	正答率の差 (音声-文字) (%)
議事	26.3	-53.5
強力	33.3	-42.4
集合	54.5	-39.4
描画	46.5	-37.4
廃	41.4	-32.3
助成	40.4	-31.3

表3 中国人学生：音声版の正答率が文字版の正答率を下回っている語 (6語)

項目	正答率(%)	正答率の差 (音声-文字) (%)
勝訴	29.4	-68.6
強力	29.4	-56.9
拙稿	29.4	-54.9
下巻	35.3	-52.9
融和	37.3	-52.9
凸	37.3	-51.0

が、具体的に正答率の低かったのは、表2、表3に示す項目である。表2は韓国人学生の、表3は中国人学生の、それぞれ正答率が低かった6語を示す。

韓国人学生と中国人学生の結果を比較すると、韓国人学生の方が音声版と文字版の相関が高く、正答率の差が小さかった。また、音声版の正答率が文字版を下回っている語彙は、総じて書き言葉で使われる語が多かった。中国人学生の音声版で正答率が低かった語彙は、文字版では母語知識での理解が容易な語が多く見られた。「強力」は韓国人学生も中国人学生も正答率の差が大きかった。これは高頻度の同音語「協力」があるからではないかと考えられる。

5. まとめ、教育への示唆と今後の課題

漢語については、中国人学生の場合、文字モードでは母語知識による理解が先行する傾向が強い。韓国人学生においても、母語である韓国語からの類推が可能な漢語も多く、日本語の音声で理解していない語もあると思われる。漢語の多い学術系の語彙については、音声モードによる学習・教育を強化する必要があることが今回の調査で示唆された。学術語彙を含む聴解やディクテーションなどが有効だと考えられる。

(メールアドレス sophia@faculty.chiba-u.jp)

参考文献

- 1) 松下達彦：日本語の学術共通語彙 (アカデミック・ワード) の抽出と妥当性の検証, 2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集, No.41, pp.244-249 (2011)
- 2) 松下達彦・佐藤尚子・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：第一言語・第二言語としての日本語語彙量と漢字変換力の測定, 2016 年日本語教育学会国際研究大会予稿集 (2016)
- 3) 松下達彦・佐藤尚子・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：日本語学術共通語彙の習得—第一言語による違いに着目して—, 2018 年日本語教育学会国際研究大会予稿集 (2018)
- 4) 松下達彦：日本語学術共通語彙リスト Ver1.01, <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/VocabularyRoom/index.html> (2019年12月21日参照)

*本研究は JSPS 科研費 18K00679 の助成を受けた。

介護分野の中国人技能実習生 受入れ現場における問題意識

— 継時的なインタビュー調査から —

The Awareness of the Issues of Japanese Care Workers and Chinese Technical Intern Trainees in the
Caregiving Fields : Based on 3 Interviews Over 8 months

高野 駿^{※1}
TAKANO, Shun

キーワード : 介護分野の技能実習生、外国人介護人材、SCAT

Keywords: Technical Intern Trainee in the Caregiving Fields, Foreign Care Worker, SCAT

1. はじめに (背景および目的)

介護分野の技能実習生 (以下介護の実習生) の受入れにあたっては、入国後の日本語研修や学習支援、学習時間の担保や能力の継続的な向上等の点で懸念が拭えないという指摘¹⁾がある。しかし、技能実習制度に介護職種が追加されて間もないこともあり、受入れ現場に焦点が当たった調査や研究がなく実態が掴めない。そこで本発表では介護の実習生及び介護の実習生と頻繁に関わる日本人職員に継時的な半構造化インタビューを行い、就労開始後の過程でどのような課題や問題意識を抱えたのか明らかにする。

2. 方法

調査協力者は関東地方の特別養護老人ホームで就労する中国出身の介護の実習生 2 名と日本人職員 3 名 (以下 C1・2, J1~3) である。C1 は 2018 年 10 月から、C2 は 2019 年 1 月から就労している。就労開始時の日本語能力は C1 が N3、C2 が N2 だった。一方、J1~3 は介護職として 10 年以上の経験があり、新人職員を指導する立場にある。J1・3 は C1、J2 は C2 の指導主任であり職場で頻繁に接する。調査回数は原則 3 回 (2019 年 4 月頃・7 月頃・11 月頃)^{注1}で、就労や受入れの感想、日本語学習や学習支援の問題意識等について尋ねた。C1・2 への調査時は通訳者を同伴し二対一で、それ以外は一対一で行った。調査は 1 人あたり約 1 時間かけて行い、音声は全て録音、翻

訳、逐語化してテキストデータにした^{注2}。

データは質的データ分析手法の SCAT²⁾により分析した。SCAT では、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念という順でコーディングを行い、最後に <4> の構成概念を紡ぎストーリー・ライン (以下 SL) を作成する。この SL により調査協力者の課題や問題意識に関して記述的な理解を得ることができる。

3. 結果および考察

作成した SL は紙幅の関係上全て提示することが難しいため、特に問題意識が読み取れる記述を一部抜粋して提示する (表 1 参照)。

表 1 から、調査協力者は各段階で多様な問題意識を抱えていることがわかる。例えば、J1-b や C1-a、C2-a・b から就労開始直後の「聞く」「話す」に関する困難が読み取れる。政府は介護の実習生の日本語能力として、実習 1 年目は N3 程度が望ましい水準で N4 程度が要件だと定めている。C1 及び C2 は望ましいとする水準を満たしているが、就労開始直後には困難があった。また C1-c・f や C2-c・f・i・j からは学習目標やキャリアに関して継続的な問題意識があることもわかる。キャリア形成の意識は C1・C2 で異なり、C1 は日本への家族の呼び寄せ、就労継続のために介護福祉士国家資格取得^{注3}を目指し、C2 は他職種のキャリアに魅力を感じている。両者は学習管理を

^{※1} 首都大学東京大学院人文科学研究科博士前期課程

表1 調査協力者のSLの抜粋にみる問題意識（【 】内は構成概念を示す）

	J1	J3	J2	C1	C2
第一回調査	a.施設Aに中国人がやってくる聞いたときは【メディアが形成する中国人イメージによってもたらされる漠然とした恐れ】があった b.受入れ当初【挨拶程度の日本語能力による理解確認の困難さ】はあった c.【多忙さによる面談実施の難しさ】はある		a.【日本語によるコミュニケーションに対する不安】があった b.【伝えきれているかの不安】や【伝え方の難しさ】を感じることはある	a.来日当初は【急変するJFL-JSL環境】の中、【挨拶程度の日本語】で【日本語が全く聞き取れない状況】だった b.【どんどん難しくなる日本語】という状況に変わりはない c.【介護福祉士国家試験の難しさに対する不安】や【介護福祉士国家資格の有益性への疑念】を抱く【学習目標の曖昧化】が起きており【外発的動機付けの必要性】を感じている	a.【急変するJFL-JSL環境による聞き取りの困難さ】を感じたため、【来日前後の日本語講習における「話す」練習の必要性】を感じている b.実際、就労開始直後は【単語による会話】となった c.【キャリア意識のゆれ】もあるため【学習目標の曖昧化】が起きている d.【来日後の日本語講習のレベルの低さ】があり【自身の日本語レベルとの見合わなさ】があった
第二回調査	d.【次のステップである記録業務の伴う夜勤】については【業務の話を「書く」難しさ】があるため【記録の練習の必要性】を感じる e.【専門的な言葉を「読む」難しさや専門的な言葉を用いて業務の話を「書く」難しさ】がある	a.外国人職員は特に初めのころは【介護の専門用語の通じなさ】があるため入国前後の講習ではある程度の【専門用語の導入の必要性】も感じる b.【限られた時間内での記録練習の難しさ】があるため【次のステップである記録業務へなかなか進まない感】がある	c.【職員との連携におけるミスコミュニケーションの発生】は起きるときがある d.時折【日本語表現意図の理解への不安】を感じることももある e.入国前後の講習では【コミュニケーションに不可欠な簡単な生活の日本語の習得必要性】が感じられる	d.【聞けるが話せないもどかしさ】を抱えており【話す行為の断念】をすることさえある e.【技能実習終了後に何も残らない焦り】が募る f.【N2取得に向けた学習の疲れと介護福祉士国家試験の遠さによる学習意欲の低下】も大きい g.【夜勤に必要な記録業務の難しさ】を実感しており、【多忙な職場ゆえの記録の練習機会づくりの難しさ】がある中で、練習があってもうまくいかず【若干の諦められた感】を感じる	e.【専門用語の聞き取りの難しさ】も感じる f.【学習の先延ばし】が続く。また【N2を短期間で取得した経験によるN1獲得への自信】があるため【無計画な学習】になっている今【学習の停滞感】を自覚している g.【合わない話題】で自身の【コミュニケーションの苦手意識】も働き【話したくない気持ち】になる
第三回調査		c.記録業務では【日本語のニュアンスの難しさや入力】の難しさや【正確に「書く」】の難しさがある d.【専門用語・施設用語の多少の通じなさ】は今後の指導対象 e.【介護福祉士国家試験対策研修と学習期間設置の望ましさ】も感じている	f.【服薬について「書く」こと】の難しさがある g.C2の参入で【伝達内容の理解度への不安に起因する理解確認の必然的増加】が起こっている h.【介護福祉士国家試験の日本語の難しさ】はあるため【日本語支援の必要性】がある	h.【自分と他の職員との間に発生する通じていない感】や日本人職員から【話しかけられない感】を抱く i.【尽きない日本語の問題】がある j.【仕事以外では日本人と話さない限定的な日本語会話場面】のため【生活の日本語の難しさ】がある k.【地域日本語教室の効果の感じられなさ】と限界【】があり行かなくなった	h.【話す練習の必要性】を感じている i.N1取得は【ぼんやりとした目標】になっている j.【3年後のイメージがわからない感覚】があり、【出口の見えなさ】を感じている

監理団体^{注4}に委ねているが、キャリア形成に繋がる学習は上手く進められていない状況にあるように窺える。他にも介護の専門日本語や業務に関わる問題意識（J1-d・e, J3-a～d, J2-f, C1-g, C2-e）、日常会話等の生活の日本語やその学習に関する問題意識（J2-e, C1-d・i～k, C2-h）、コミュニケーションに関する問題意識（J2-b～d, g, C1-h, C2-g）等は介護の実習生・日本人職員に共通してみられた。

4. おわりに

これまでの介護分野の日本語教育の対象となってきたのは主にEPAの枠組みにあるEPA介護人材であるが、西郡ら³⁾は「介護分野の日本語教育について、必要と思われる支援を徐々に拡充しつつある」としている。そのような支援は本発表で明らかになった介護の実習生受入れ現場における問題意識の解消にも役立てられると考えられる。しかし、キャリアに関する問題意識やそれを解消するキャリア形成支援に関しては西郡ら³⁾も指摘するようにまだ十分に議論が蓄積されていないため、今後議論を深めていく必要がある。また本発表では中国人の介護の実習生に調査協力を得たが、今後は非漢字圏出身者やN4程度の日本語能力を持つ者など介護の実習生をより包括的に捉え調査を拡大・継続し、本研究の結果と比

較することで問題の全体像を掴んでいく必要がある。

(takano_shun@yahoo. co. jp)

注

注1 施設の人員配置変更に伴いJ1・J3への調査回数は2回（J1:第一回・第二回, J3:第二回・第三回）となった。

注2 本研究は首都大学東京の研究倫理委員会から承認を受けており、録音等は許可を得て行った。

注3 介護福祉士国家資格を取得すれば、家族帯同が可能で在留期間の更新回数制限のない在留資格「介護」が取得できる。

注4 技能実習生の技能等習得を監理する非営利団体。

参考文献

- 1) 布尾勝一郎：介護分野の外国人技能実習生に求められる日本語能力はいかに議論されたかー厚生労働省有識者検討会を題材にー, 佐賀大学全学教育機構紀要, vol. 6, pp.71-83 (2018)
- 2) 大谷尚：質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで, 名古屋大学出版会 (2019)
- 3) 西郡仁朗, 小原寿美, 平井辰也, 小平めぐみ：外国人介護人材のキャリア形成における現状と課題ーよりよい受け入れの在り方とはー, 2019年度日本語教育学会春季大会予稿集, p.43 (2019)

第22回専門日本語教育学会シンポジウム

外国人就労と専門日本語教育の役割

プログラム

15:30～15:35 主旨説明

「特定技能」が創設された今、外国人就労に必要な専門日本語教育が何かを問う

深澤 のぞみ（専門日本語教育学会会長）

15:35～16:00

外国人就労の場で必要とされている日本語

田中 尚人（協同組合アドビジネスセンター理事長）

16:00～16:20

現場の専門家と日本語教師の連携をどのように行うか

加藤 敬子（金沢大学大学院博士後期課程修了）

16:20～16:40

留学生から働く人へ そのプロセスに必要なことは何か

高沼 理恵（金沢大学特任助教）

16:40～17:00

外国人が現場で働くときに必要な日本語とビジネス日本語

王 凱（中国南開大学副教授）

17:00～17:25

フロアとのディスカッション

17:25～17:30 総括

（以上、敬称略）

主旨説明

「特定技能」が創設された今、外国人就労に必要な専門日本語教育が何かを問う

深澤 のぞみ（専門日本語教育学会会長）

2019年4月に出入国管理及び難民認定法が改正され、新しい在留資格である「特定技能」が創設されました。日本は、これまで専門性を必要としない単純労働に従事する外国人を受け入れてきませんでしたが、この法律により、様々な種類の外国人単純労働者を受け入れていくという画期的な転換をしました。さらに、同年6月には「日本語教育の推進に関する法律」も公布され、外国人に対する日本語教育は、国、地方公共団体、そして事業主の責務であるということが明記されました。

その後、特定技能評価試験や日本語検定の準備の遅れなどが原因で、「特定技能」での受け入れがまだ少ないことが報道され始め（出入国在留管理庁の特定技能在留外国人数の発表など）、なかなか簡単に外国人就労者の受け入れが進まない現状があるようです。専門日本語学会は、外国人の就労に必要な日本語についての調査や研究を扱う学会であり、このような様々な動きの中で、その現状を的確につかんだり、解決策を模索したりするなど、重要な役割を果たす学会の一つであるとも思われます。

そこで本研究討論会では、外国人就労者が増えるなか、専門日本語教育の役割を考えるシンポジウムを企画しました。外国人就労者を雇用する事業主と関係が深い共同組合アドビジネスセンターの理事長田中尚人氏、医療現場における外国人看護師候補者への日本語指導や支援の経験を持ち、現場の専門家と日本語教師の連携について博士論文をまとめた加藤敬子氏、金沢大学で留学生の就職支援に当たっている高沼理恵氏、自らも日本企業で働いた経験があり、現在は中国の大学でビジネス日本語プログラムの企画と指導を行っている王凱氏から、それぞれの経験から専門日本語教育に求められることを述べていただきます。そして、これらの講演に基づきフロアとのディスカッションを行うことを通して、外国人就労と専門日本語学会の関連を明らかにし、果たすべき役割を浮かび上がらせることを目的とします。

発表要旨

1. 外国人就労の場で必要とされている日本語

田中 尚人（協同組合アドビジネスセンター理事長）

訪日外国人の受入環境整備事業を10年ほど携わってきたが、その中で留学生や在住外国人と交流する機会があり、彼らの悩みや課題なども聞くようになった。観光の受入環境整備は積極的に取り組まれているが、在住外国人の受入環境整備に関しては、まだまだ遅れており、早急な取り組みを行う必要性を感じている。その1つとして、国内で暮らす為に必要と思われる日本語教室に関して、どのような取組みがされているか、企業へのヒアリングや、企業が実施している日本語教室の見学を行うなど、一部であるが、その実態などを交えて報告をしたい。

2. 現場の専門家と日本語教師の連携をどのように行うか

加藤 敬子（金沢大学大学院博士後期課程修了）

外国人就労者が増える中、外国人が上手く仕事ができないと、日本語ができないからだと考えられてしまい、日本語の躓きの原因を検討されることはほとんどない。そこで、発表者は経済連携協定(EPA)に基づく看護師候補者を対象とし、看護師国家試験受験支援を通し、看護師候補者の躓きの原因を調査した。

その結果、専門知識以外に、語彙、省略された主語、動作主および行為の受け手の関係など文章の読み取りの間違い、文化背景の異なりが誤答原因となっていることが分かった。日本語教師の役割としては、これらの躓きの原因を看護の専門家に伝え、指導に生かしてもらうこと、および、日本語教師自身が躓きの原因を克服させるために意識的に日本語教育の中で扱っていくことであると考えている。

3. 留学生から働く人へ そのプロセスで必要なことは何か

高沼 理恵（金沢大学特任助教）

高度人材として就職する留学生と採用した企業の願いは、就職ではなく入社後の活躍である。そのために留学生は、在学中の準備、就職活動、入社後という3つのフェーズで必要な多様なことを学ばねばならない。ビジネス日本語やキャリア教育（インターンシップ含む）を通じ日本の雇用・組織文化理解等を学び、就職活動では、ビジネス語彙の習得、中等教育内容の日本語での理解も求められる。入社後は、教科書上のビジネス日本語以上に、日本人が無意識に使う曖昧な指示表現やその背景、非言語コミュニケーション等の異文化適応能力が必要となる。入社後の活躍のためには、勿論留学生自身が学ぶ必要もあるが、企業側の言語にまつわる歩み寄りも必要ではないか。

4. 外国人が現場で働くときに必要な日本語とビジネス日本語

王 凱（中国南開大学副教授）

世界経済のダイバーシティにより、「外国人」に対する認識と日本で働くことを前提として想定されてきた「現場」の境界が曖昧になった。それらの「変数」を考慮すれば、不自由なく働ける「必要な日本語」を限定することが難しい。従来、ビジネス日本語のそのものと認識されてきた正しい日本語、とりわけ敬語だけでなく、ビジネスに関わる常識と専門知識やコミュニケーション能力も欠かせない。それも中日2カ国間ではなく、第三の市場に進出することを考えれば、グローバル化とローカル化を両立させるような、より広義の「ビジネス日本語」が今後必要だろう。それに対応する教育現場における用意ができていないかが問われている。

第22回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2020年3月6日発行

© 専門日本語教育学会 2019

専門日本語教育学会事務局

京都産業大学 渡辺史央研究室

〒603-8555 京都市北区上賀茂本山

TEL&FAX: 075-705-1567

E-mail: office-stje@kir.jp

発行：第22回専門日本語教育学会実行委員会

太田亨（金沢大学・委員長）

深澤のぞみ（金沢大学）

深川美帆（金沢大学）

札幌寛子（金沢工業大学）

濱田美和（富山大学）

印刷：有限会社ヤマダスピード製版

TEL: 0120-939-834

〒815-0031 福岡市南区清水2丁目15-30

専門日本語教育学会